

## 「汚い」を越えられるか

船岡 みさこ

古来、歌に詠まれてきたものはさまざまであったが、その中心には「美しいもの」があったように思える。では、一般的には「汚いもの」として扱われているものを詠んだ歌なのか。世の中、左右があり、天地があり、陰陽があるように、対称的なものはさまざまに存在する。とすれば、声に出しては読みづらいような歌、食事時には目に避けたような内容の歌も、詠まれているはずだ。ここでは、衛生的な面からも普通は素手でさわらないような「汚いもの」を歌にしている三人の作品をとりあげてみたい。

### ☆穂村弘

サバンの象のうんこよ聞いてくれだるい  
せつないこわいさみしい 『シンジケート』

不衛生なものとしてまずあげられるのは排泄物だろう。ここでは「うんこ」というストレートな表記が目を引くが、主題は感情の微妙なゆらぎであり、詠まれているのが人のものではなく象の糞であるため、どこか童話的で詩情を感じさせる。このごろ子供達に人気の『うんこ漢字ドリル』シリーズとも共通する素直さ、無邪気さ、茶目っ気によって多くの人

に受け入れられている貴重な一首といえよう。

それぞれ夜の終わりにセロファンを肛門  
に貼る少年少女 『水中翼船炎上中』

しーしーと蟬たちの声降りそそぐ踊り場に  
君のげろはなかった

オオカミの胃液と血とに全身を濡らしてあ  
ゆむ赤ずきんちゃん

前述の歌は第一歌集のものが、歌の素材として異質なものを詠もうとする姿勢は最新の歌集でも変わらない。一首目はぎょう虫検査を詠んでいるのだが「肛門」が生々しい。仮に「お尻」や「臀部」などにしたらどうだろう。音数の問題もあるが、お尻や臀部ではセロファンを貼る場所が違ってくるし、ほんやりした歌になってしまう。必要あつての生々しさなのだ。二首目、夏の階段の踊り場である。なぜそこに「君のげろ」があると思っていたのか分らないが、とにかくそれはなかった。「靴」でもなく「帽子」でもなく「げろ」を想像することで、なぜか蟬たちに嘲笑されているような気が配が感じられる。三首目、童話の矛盾点について容赦ない。そもそも童話はファンタジーであるから、現実にはありえな

い設定ばかりだ。それをわざわざ指摘し、本当ならこのようになるはずだとホラー映画のように描いてみせて、別の角度から童話を読むという遊びを提示している。

宇宙船のマザーコンピュータが告げるごき

ぶりホイホイの最適配置 『水中翼船炎上中』

ごきぶりを吸い込みたての掃除機が浮かび

あがつてくる熱帯夜

スプレーで瞬間的に凍らせたゴキブリたち

を棄てる未来へ

名前を口にしたくないあまり、イニシャルで「G」と呼ぶ人もいるほど嫌悪されている虫の歌である。見かけしだい退治したいだろうから、三首ともこの虫への対処法が描かれているのは妥当かもしれない。一首目、宇宙船という言葉から人類とこの虫との長きにわたる闘いが壮大に描かれる、と思いきや登場するのは昔ながらの駆除用品である。宇宙船との対比に人類の無力感が漂う。二首目、何らかの方法で退治したものの、それを吸い込んだ掃除機が気になっている。何しろ「吸い込みたて」である、中でまだ動いているかもしれないという不気味さと気温の高さが相まって、眠れない夜になった。三首目は凍らせるタイプの殺虫剤。今のところいちばん簡単で恐怖レベルの低い退治方法であろうか。「未来へ」という言葉は人類の勝利宣言のようでもある。だがスプレーのかけ方が甘いと生き返ることもあるようで、勝利宣言は嫌喜びになるかもしれない。

穂村の歌はいずれも、小学生の男子が虫や蛙を捕まえて女

子に見せる時のように、悲鳴を期待して意識的に詠まれている印象がある。言わばお化け屋敷のように、一瞬驚かされるが、な—んだとすぐ息をつける「美しくないものの歌」のアトラクションなのである。

☆佐佐木定綱

第六十二回角川短歌賞の受賞作に強い印象を残す歌があった。

恨みなく敵意もないけどハンドルを這うナ  
メクジを叩き落とした

突っ伏して嘔吐を始めるお客様ありがとう

ございました大丈夫ですか？

男性の吐瀉物眺める昼下がりがカニチャーハン

ンかおれも食いたい

君の排泄物と僕の吐瀉物を引き合わせろよ

下水処理場

読者は、描写された情景を頭の中で映像にして理解する。何の心構えもなくこれらの歌を読み、脳内でリアルに再生してしまった私は動揺した。選考座談会で東直子が「露悪的」だと指摘しているが同感である。

一首目、ナメクジを好きな人は少数派だろう。現実には起きたことなのか何かの比喩なのか分からないが、「ハンドルを這うナメクジ」は運転の邪魔であるしそもそも不快だ。しかしそれを叩き落とす行為には感情が伴っていないようで、ナメクジに感じる以上の恐れを感じさせる。二首目は、嘔吐し

て店を汚しても丁重に対応しなければならぬ接客業の場面を描いている。「突っ伏して嘔吐を始める」様子がまざまざと想像されて、気持ち悪くなる人もいよう。三首目はその吐瀉物を見ての歌。実際に下の句のように感じたわけではないと思いたいが、この詠みぶりはまさに露悪的だ。だがこのような物の見方もある、という衝撃は受けた。四首目、この歌の数首前に上水道の歌があり、それに対しての下水の歌だと思われる。下水処理場とはたしかにそういうことの起こる所だが、わざわざ取り合わせて詠んでいる。二種類の汚物は他の何かで代用することも可能だろうが、あえてそうしないのが作者のスタンスのようだ。

佐佐木は受賞発表号の前後で当該雑誌の時評を担当しており、そこで「ぼくは露悪的なことをあまり悪いことだと思っていない。」「汚くて嫌悪感を催すようなものだとしても、目をそらさずにいたい。」「きれいなものも汚いものも、ぐちゃぐちゃなこの世界を、清濁飲み干して、歌い切りたい。」と書いている。その意気は買いたい。ただ、汚さを越えてその奥に何か見えてくるものがなければ、それは汚いだけの歌で終わってしまうだろう。

#### ☆野口あや子

ふるえつつ鼻水ふとる 駅前のバスターミ  
ナルのかたちのように 『眠れる海』  
芹吐けり冬瓜吐けりわたくしのむすめにな  
りたきものみな白し

母よそれでも怒りは怒りでほかなきに石を濡らして小用をせり

ここまでいくつかの「汚いもの」の歌を見てきて、もはや鼻水ではインパクト不足の気がするが、これも積極的に詠まれないものの一つだろう。一首目、寒い日なのか泣いているのか、鼻水が出てきて垂れてしまいそうな様子。形を観察しているのだから近くに誰かのだろうが、自分のことのようにも思われる。詳細は不明ながら、「駅前のバスターミナル」の比喩が予想外で印象に残る。二首目、あとがきによれば、作者は長く摂食障害に苦しんでいたというから、その一場面か。しかしこの歌だけを読めば、つわりで何を食べても吐いてしまう苦しみの歌ともとれる。実際に吐いた物や色が具体的であるため、例によって脳内再生してしまった私も少し気分が悪くなった。三首目、この歌も詳細はよく分からない。用を足しているのが母なのか作者自身のかも読み取れなかった。だが小用で石が濡れるというリアリティによって、見てはいけな場面を見てしまうという疾しさが読者に生じる一首である。

剃刀を鏡にうつしゆまりするいきのこると  
はゆるい甘さだ 『眠れる海』

だえきけつえきふんにようまじりてわたし  
たち夜の川なりまだここに  
粘液に血液まじりあたらしき黒いウールを  
香らせており

一首目は風呂場だろうか、トイレではない場所で排尿して

いる。剃刀を手に死を意識したのかもしれない作者が「ゆま  
りする」ことで「生」を実感している。二首目、凄まじい言  
葉の羅列である。それが混じってどろどろしたカオスに一組  
の男女がおり、国生みの神話をさえ思わせる。私たちはこん  
なカオスから生まれてくるのだと。並んでいる言葉のインパ  
クトのわりに汚く感じないのは、現実の描写ではないからだ  
ろう。三首目、体のどこかにじくじくした傷口があるのか、  
月経の始まりかあるいは性的な何かの象徴か。いずれにして  
も「粘液に血液まじり」が生々しくおどろおどろしい。

『眠れる海』には身体の歌、性愛の歌が多くあった。とい  
うより身体そのものが一冊を通してのテーマなのだろう。そ  
れゆえ自然なこととして排泄物や体液が詠まれたのだと思う。  
「汚いもの」を詠もうと意識したのではなく、身体からにじ  
み出るように、こぼれだすように作歌をした結果、これらの  
歌も生まれたのだ。

和歌の時代から歌人は美しいものを詠んできた。とはいえ、  
美しくないもの、汚いものを詠んでみた人もそのような歌を  
読みたいと思った人も一人や二人ではあるまい。それが今、  
多くの人がすぐ思い浮かべるような歌として残っていないの  
は、歌としての魅力がなかったからではないだろうか。

「歌壇」二〇一九年二月号のインタビュで島田修三が次  
のように述べている。

「短歌って、特にきれいごとになりがちです。雅な言葉、  
優美な言葉。もちろん、それもすごく大事ですが、生きて

いると、そこをはみ出すことがある。吐瀉物だ、ゲロだと  
しか言いようのないものつてあるものな。」

それに答えてインタビュアーの佐佐木定綱が「リアリズム  
の追求としていやなものやなものとして歌う。」と返し  
ている。島田の言葉にも佐佐木の言葉にも説得力があり、気  
づかされることがある。

たしかに短歌をきれいごとだけのものにしてはいけないと  
思う。きれいごとだけでは掬いとれない領域の世界を掬いと  
つてゆけば、短歌はもつと広がり深みを増すのではないだ  
ろうか。

人は美しいものを求める。美しいものに触れば心が和み、  
癒され、気持ちがよくなるからだ。反対に汚いもの、嫌なも  
のからはできれば目を背けたい。しかし、美しいものを美し  
いと感ずるためにも、時には汚いものが必要ではないだろう  
か。香水を作る時、良い香りの成分ばかりでは完成しないの  
だという。ほんのわずか、悪臭と感ずるものを加えることで  
人を引きつける香りになるのだと。世の中には相反するもの、  
対極にあるものが多く存在するように、短歌にもそれはあつ  
て当然、いや必要なものだろう。

ただ、美しさの対極にあるものは強烈な印象を残す。それ  
が刺激的なだけであつたり露悪的なだけでは、その効果は一  
時的なもので終わってしまうのではないか。汚いもの、嫌な  
ものを描いてなお人の心を揺さぶるような、魅力のある歌を  
読みたいものだ。そんな歌であれば、時代を越えて百年後の  
人にも千年後の人にも届くことだろう。